



# HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	<翻訳>コンスタンティノス一代記 : 訳ならびに注(1)
Author(s)	木村, 彰一; Kimura, Shoichi; 岩井, 憲幸 他
Citation	スラヴ研究, 31, 1-17
Issue Date	1984
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/5137">https://hdl.handle.net/2115/5137</a>
Type	departmental bulletin paper
File Information	KJ00000113227.pdf



# コンスタンティノス一代記 (1)

——訳ならびに注——

木村 彰一・岩井 憲幸

## 例 言

1. 本稿は、《スラヴ人の使徒》の名で知られる9世紀ビュザンティウムの偉大な伝道者、コンスタンティノス=キュリロス (Kōnstantinos-Kurillos) の事蹟を記した“Vita Constantini”の逐語訳である。この文献は、コンスタンティノスの歿(869)後ほぼ10年の間に、スラヴ系の弟子たちによって、はじめギリシア語で書かれ、ついで古代教会スラヴ語に翻訳されたものと推定されるが、原本はともに伝わらず、15世紀以後の、いわゆるslavonによる写本が都合48点現存するのみである。

2. 底本として用いたのは次のテキストである：T. Lehr-Spławiński, *Konstantyn i Metody*. Warszawa 1967, s. 135-180. このテキストは Fr. Pastrnek のそれ (*Dějny slovanských apostoľů Cyrilla a Methoda*. Praha 1902, str. 154-215) にもとづき、失なわれた9世紀古代教会スラヴ語の原テキストを復元し、かつローマ字に転写したものである。惜しむらくは誤植とおぼしきものが若干目につくが、それらは Pastrnek のテキストとの照合によって容易に正すことができる。

3. 底本テキストのほかに、P. A. Lavrov のテキスト (*Материалы по истории возникновения древнейшей славянской письменности*. Ленинград 1930, с. 1-36) を参照し、両者が訳文をいちじるしく左右する程度に相違している場合にかぎり、底本テキストの該当箇所を注にあげた。

4. 底本テキストは各章の内部では段落を設けていないが、本稿ではおおむね Vaillant (7を見よ) に拠って段落を設けた。

5. 訳文中、〔 〕は文意をより明確にするための訳者の挿入である。

6. 本稿は、底本テキストの、日本語によるできるかぎり忠実な再現だけを目指したので、注は校訂注および聖書その他の出典の提示以外は最少限度にとどめた。歴史的背景についての情報は、例えば Fr. Dvorník の古典的名著 (7を見よ)、主として最近のソ連の学者の研究を踏まえた *Skazanija* (7を見よ)、ないし主としてブルガリアにおける最近の研究成果を簡潔明快に整理した小船井文司、〈キリルとメトディ〉、I-IV (東海大学文明研究所、「バルカン・小アジア研究」I [1975], III [1977], IV [1978], V [1979])、などから豊富に得ることができる。

7. 本稿を準備するに当たって、底本に付せられた Lehr-Spławiński 自身のポーランド訳および注のほかに、次の文献所収の訳および注を参照した。

Dvorník=Fr. Dvorník, *Les légendes de Constantin et de Méthode vues de Byzance*. Hattiesburg, Mississippi 1969.

Skazanija=Z. V. Udal'cov *et al.*, Сказания о начале славянской письменности. Москва 1981.

Vaillant=A. Vaillant, Textes vieux-slaves, II. Traduction et notes. Paris 1968.

Bujnoch=J. Bujnoch, Zwischen Rom und Byzanz. Graz 1958.

菱山 忍, <〔訳・註〕 聖キリール伝>。「京都産業大学紀要」第1輯 (FL 系列「外国語と文化」第1号), 1969; 「京都産業大学論集」第3号「外国語と文化系列」第1号, 1972; 「京都産業大学論集」第2巻第3号 (「外国語と文化系列」第2号), 1973.

8. 故菱山氏が1973年に“Vita”の完訳を果たされたことは非常な功績である。ただ菱山氏とわれわれとでは、テキストの《読み》がかなり多くの点で異なっているので、本稿はいわゆる屋上屋を架するの愚は犯していないと信ずる。

## 本 文

2月14日<sup>1)</sup>に。スラヴの民の最初の導師、至福なるわれらの師父<sup>2)</sup>、哲人コンスタンティノスの追想と一代記<sup>3)</sup>。

父よ、祝福を垂れ給え!

I.—あわれみと慈愛に富まれる神は<sup>4)</sup>、すべての人が救われて、真理を悟るに至るよう<sup>5)</sup>、人々の悔い改めを期待しておられる。たとえ人がはなはだしく悪に身を委ねようとも、神は罪びとの死を願わず、悔い改めと生を願っておられるからである<sup>6)</sup>。神は、人類が弱さのゆえに墮落し、悪魔の誘惑に陥って滅びることをお許しにならず、いかなる年にも、いかなる時にも、世の初めにおいても現在においても、まず初めに〔ユダヤ人の〕族長たちと長老たち、次に予言者たち、次に使徒たちと殉教者たち、さらに義人たちと師父たちをとおして、〔—〕安らぎを知らぬこの〔世の〕生から、彼らをお選びになりつつ〔—〕、多くの恵みをわれわれに注ぐことをおやめにならない。なぜなら主は、次のように言われた〔ことから分かる〕ように、主に属するおのれの人々を知っておられるからである。「わたしの羊はわたしの声を聞く。わたしは彼らを知っており、彼らの名を呼び、彼らはわたしについて来る。わたしは、彼らに永遠の生を与える<sup>7)</sup>。」

そのことを、神はわれわれの世代においてもなされた。神はかの師父をわれわれのためにお呼びになり、かの師父は、弱さゆえに、あるいはむしろ悪魔の奸計ゆえに、おのれの理性をくもらせ、神の掟の光の中を歩もうとしなかった<sup>8)</sup>わが民を教化したのである。彼の〔この〕一代記は、短い物語ではあるが、彼がいかなる人物であったかを示している。

1) コンスタンティノス=キュリオスの命日。生年は826年、ないし827年と推定される。

2) 底本《blaženajego učitelja našego》。

3) 底本《Память і житъје》。

4) ヨエル, ii, 13.

5) テモテ I, ii, 4.

6) エゼキエル, xviii, 23; xxxiii, 11; ペテロ II, iii, 9.

7) ヨハネ, x, 27-28; x, 3.

8) ヨハネ I, i, 7.

それは、望む者がこれを聞いて心の目を覚まし、怠惰をなげうち、使徒が〔次のように〕言ったように、彼にならう者となるためである。「わたしがキリストにならう者であるように、あなたがたもわたしにならう者となるがよい<sup>1)</sup>。」

II.—テッサロニケ(Thessalonikē)の町に<sup>2)</sup>、高貴な家柄の出の富裕なひとりの人物がいた。名をレオン(Leōn)と言い、軍政長官(stratēgos)麾下の千人長(drouggarios)<sup>3)</sup>の位にあった。さて、彼は、かつて〔の〕ヨブのように信仰があつく<sup>4)</sup>、神の掟をすべて落度なく守っていた。彼は妻とともに暮らし、7人の子をもうけたが、そのうち7番目の末子が、われわれの導師であり師父である哲人コンスタンティノスであった。さて、母が彼を産んだとき、〔人々は〕彼に乳を飲ませるために彼を乳母にあずけた。だが子供は、乳離れするまで、母親以外の他人の乳房をけって受けつけようとしなかった<sup>5)</sup>。これは、良い根から出た良い新芽は、けがれの乳で育てられるようにという、神のご摂理から生じたことである。

そののち、この良き両親は互いに申し合わせて、ねやをとみにせず、互いに身をきよく保ち、死が二人をひきはなすまで、14年間、主において兄と妹のように暮らし、その申し合わせに一度もそむかなかった。さて、レオンが〔神の〕裁き〔の場〕におもむこうとしていたとき、その子供の母は泣いて〔こう〕言った。「わたしが心配することは、なにもありません。ただ、この子をどのようにして教え導くかということだけ〔が心配です〕。」すると、レオンは彼女に向かって言った。「妻よ、わたしを信じるがよい。わたしは神を信頼している。神はこの子にすべてのキリスト教徒を教え導く父とも指導者ともなる方<sup>6)</sup>をお与え下さるだろう。」そして、まさしくそのとおりになった。

III.—さて、少年は7歳のとき、夢を見た。彼は〔それを〕父と母に告げて、〔こう〕言った。「軍政長官がわたしたちの町の乙女をすべて集めて、わたしに言いました。『配偶者として、また助け手にする自分と同じ年頃の乙女として<sup>7)</sup>、これはと思う者を、この中から選ぶがよい。』そこでわたしはあたりを見まわし、注意して一同をながめ<sup>8)</sup>、その中でいちばん美しいひとりの乙女に目をとめました。〔その〕顔は輝かしく、〔身は〕黄金の首飾りと、真珠と、あらゆる装身具で美々しく飾られていました。その名はソ피아(Sophia)、すなわち知恵でした。この者をわたしは選びました。」このことばを聞くと、両親は彼に向かって言った。「わが子よ、おまえの父の律法を守り、おまえの母の教えを捨て

1) コリント I, iv, 16; xi, 1.

2) 底本《Vъ Solunъscě gradě》.

3) 9—10世紀のビザンティン帝国はいくつかの軍管区(thema)にわかれ(テッサロニケ軍管区もその一つ)、軍管区の長を軍政長官(stratēgos)と称した。千人長(drouggarios)は軍政長官の指揮下にあった中位の役職のひとつで、1000人またはそれ以下の部隊の長であった。

4) ヨブ, i, 1.

5) 底本《ne rači se jęti po tužď sъsъcъ》.

6) 皇帝を指す。

7) 底本《podružbje i na pomoštъ sъvręstъ sebě》; 創世記, ii, 18.

8) 底本《sъmortъ》を《sъmotfъ》に改める。

るな<sup>1)</sup>。律法の掟はともしびであり、光であるからだ<sup>2)</sup>。英知に向かって、『わが姉妹となれ』と言い、知恵をおのれの友とするがよい<sup>3)</sup>。英知は太陽よりも〔明るく〕光り輝いているからだ<sup>4)</sup>。もし、おまえがその乙女を配偶者として自分のもとへ連れて来れば、おまえは彼女のおかげで多くの災を免れるだろう<sup>5)</sup>。』

さて、両親が彼に学問を習わせると<sup>6)</sup>、彼は世にもすばやい記憶力によって<sup>7)</sup>、どの生徒よりもはやく各教科に上達し、一同の驚嘆的であった。さてある日、〔――〕狩りをしてたのしむのが金持ちの子弟の習慣であるのに従って〔――〕、彼は自分のハイタカを<sup>8)</sup>連れて彼らといっしょに野原へでかけた。彼がハイタカを放すと、神のご摂理によって一陣の風が起こり、ハイタカを捕えて運び去った。そのため、少年は落胆し、なげき悲しんで、2日の間〔ものを〕食べなかった<sup>9)</sup>。あわれみに富まれる神は、人間に対する愛の心から、彼が俗事になじむことを望まれず、苦もなく彼を捕えられたのである。さながら、むかし鹿狩りのときプラキダス (Plakidas)<sup>10)</sup>を捕えられたように、彼をハイタカによって捕えられたのである。彼は心中この世のむなしさ<sup>11)</sup>を思い、なげいて〔こう〕言った。「喜びのかわりに悲しみがつきまとうのが、この世というものなのか。きょうからわたしは別の、これよりもよい道を歩み、この世の喧騒の中でおのれの日々を空費することをやめよう。』

それから彼は勉学にとりかかり、家にとじこもって神学者聖グレゴリオス (Grēgorios)<sup>12)</sup>の書物を暗記した。彼は壁に十字のしるしをえがき、次のような聖グレゴリオスへの讃辞を書きつけた。「グレゴリオスよ、人間の身ながら、天使の魂を持つ者よ。おんみは人間の身でありながら、天使として〔この世に〕あらわれ給うた。なぜなら、おんみの口はセラフィムのひとりのように神をたたえ、まことの信仰を示すことによって全世界を照らし出し給うのであるから。されば、愛と信仰をもっておんみの前にひれ伏すこのわたくしをも受けいれ給いて、わが師とも先達とも<sup>13)</sup>なり給え。」このように彼は誓った<sup>14)</sup>。

さて彼は〔グレゴリオスの〕多くの説教と博大な思想とに心を潜めたが、〔その〕奥義を解することができず、はなはだしく意気消沈した。さてその地に文法学の知識のあるさる異国人がいた。彼はその人のもとにおもむいて、足もとにひざまずき、〔おのが〕心を彼にゆだねて彼に懇願した。「どうか、わたくしに」と彼は言った、「文法の術をお授けくだ

1) 箴言, vi, 20.

2) 箴言, vi, 23.

3) 箴言, vii, 4.

4) 知恵の書, vii, 29.

5) 知恵の書, viii, 2, 9; x, 9を参照。

6) 底本 《jegda že i vřdasta vř naučēnřje》.

7) 底本 《paměťjā skorojā velřmi》.

8) 底本 《kragui svoi》.

9) 底本 《ne jastř》.

10) トラヤヌス (Trajanus) 時代の伝説的な殉教者、聖エウスタティオス (Eustathios) を指す。Dvorník, 23 f. を参照。

11) 底本 《sujeta》.

12) ナズィアンゾス (Nazianzos) の聖グレゴリオス (329-389)。

13) 底本 《učitelř i prosvětitelř [sic]》.

14) 底本 《takovaja zavěštavaaše》.

さい。」だが、異国人はおのれの才能を秘して彼に言った。「若者よ<sup>1)</sup>、〔むだな〕努力はせぬがよい。わたしは、一生涯けっしてこれをだれにも教えるまいと、心に誓ったのだから。」ふたたび少年は彼を拜し、涙ながらに言った。「わたしの受け取るはずの、父の家のわたしの取り分を全部お取り下さって〔いいですから〕、わたくしにお教え下さい。」だが、この人は彼〔の言うこと〕に耳をかそうとしなかったので、彼は自分の家にもどり、おのれの心〔から〕の願いごとがかなうよう祈りつづけた。

まもなく、神はおのれを恐れる者の願いをかなえられた<sup>2)</sup>。すなわち、〔彼の〕優美さと賢明さと、彼の〔特質の〕一部をなす学問に対する勤勉さについて、ロゴテテス (logothetēs) とよばれる皇帝の官人<sup>3)</sup>が聞き及び、皇帝<sup>4)</sup>とともに学ぶように、使いを立てて彼を呼んだのである。少年はこれを聞くと、喜んで旅に出た。途中、彼は平伏し、〔こう〕言って祈りを捧げた。「わが父祖の神よ、あわれみの主よ<sup>5)</sup>、そのみことばにより万物を創り、そのおん知恵により、おんみの創り給うた万物を司るべき人間を創り給うたおん者よ<sup>6)</sup>。なにがみ心になうかを知って、わたくしが救いを得られますよう、おんみの玉座のかたわらなるおん知恵を、わたくしにお授け下さいませ<sup>7)</sup>。わたくしはおんみのしもべ、おんみのはしための子なのですから<sup>8)</sup>。」これにつづけてソロモンの祈りの残りを唱え、立ち上って「アーメン」と言った。

IV.—さてコンスタンティヌポリス (Kōnstantinou polis) に<sup>9)</sup>着くと、彼は勉学のために教師たちの手に委ねられた。彼は3月(みつき)のうちに文法学を習得し、ついで他の学問にとりかかった。彼はホメロス (Homēros) と幾何学を学び、レオン (Leōn)<sup>10)</sup>とポティオス (Photios)<sup>11)</sup>のもとで弁論術と哲学のあらゆる部門とを学び、これにくわえて修辭学と算術、天文学と音楽、さらに他の〔異教の〕ギリシアの技芸<sup>12)</sup>をすべて学んだ。彼はこれらすべて〔の技芸〕を、あたかもそれらのうち一つ〔だけ〕を習得したかのように〔すみやかに〕習得した。なぜなら、〔理解力の〕すばやさが勤勉さと結びつき、それらが互いにきそいあったからであって、〔そもそも〕学問と技芸とはこのようにして完成するものなのである。さて彼は学問〔の力〕よりはむしろ柔和な人柄を〔そとに〕あらわしつ

1) 底本《junoše》

2) 詩篇, cxlv, 19.

3) かりに《官人》と訳した底本 stroitelъ [sic] の意味は不明。ロゴテテス (logothetēs tou dromou) は、宮廷でとくに渉外関係の国務を管掌する高官の名称。当時のロゴテテスの地位にあったのは、テオクティストス (Theoktistos) (底本, 185, 注 12 に拠る)。

4) ミカエル (Mikhaēl) 3世 (838年生まれ)。

5) 底本《gospodi milosti》。

6) 知恵の書, ix, 1, 2.

7) 知恵の書, ix, 4.

8) 知恵の書, ix, 5; 詩篇 cxvi, 16.

9) 底本《къ Cēsarju Gradu》。

10) 《数学者》(Mathēmatikos) レオンは9世紀ビザンティン帝国の代表的啓蒙家のひとり。

11) ポティオスは9世紀ビザンティン帝国最大の文献学者・神学者のひとり。858年以後コンスタンティヌポリスの大主教。

12) 底本《chādožbъstvomъ》。

つ、ともにいていっそう有益な人々とだけ語らい、曲がった道<sup>1)</sup>にそれる者たちを避け、どうすれば地上的なものを天上的なものにとりかえ、この〔うつせみの〕肉体から解脱して神とともに生きることができるかということだけを目ざして行動した<sup>2)</sup>。

さてロゴテテスは彼のこうした様子を見て、彼に自分の家の支配権を与え<sup>3)</sup>、また皇帝の宮殿に自由に入ることも許した。あるときロゴテテスは〔こう〕言って彼にたずねた。「哲人よ、わたしは哲学がなんであるかを知りたいと思う。」哲人は俊敏な知性をもってただちに<sup>4)</sup>答えた。「それは、人が神に近づき得るかぎりにおいての、神のことと人のことに関する知識であります。なぜなら<sup>5)</sup>それは、行ないにおいて、人を創られたおん者の姿に似た者になれば、人に教えるものだからであります。」それ以来、ロゴテテスはいっそう彼を愛するようになり、これほど偉大な高位の人物でありながら、たえずあらゆることについて、哲人に質問した。すると彼は、博大な思想を簡潔なことばで説き明かして、ロゴテテスに哲学の教えを授けた。

哲人は身をきよく保って、神に喜ばれれば喜ばれるほど、ますますすべての人々に愛されるようになった<sup>6)</sup>。ロゴテテスは彼につつしんであらゆる敬意を表し、多くの黄金を与えようとしたが、彼は受けようとしなかった。あるときロゴテテスは、哲人に向かって言った。「きみが優美で賢明であるから、わたしはまったくのところ、いよいよもって<sup>7)</sup>きみを愛さずにはいられない。ところでわたしには、わたしが洗礼盤から取り上げた霊の娘がいる。彼女は美貌、かつ裕福で、高貴かつ偉大な家柄の出である。きみが望むなら、わたしはその娘を妻としてきみに与えよう。またきみはいまや皇帝から大いなる栄誉と〔重い〕職務<sup>8)</sup>とを受けたうえ、さらに多くを期待するがよい。きみは遠からず軍政長官になるのであるから。」すると哲人は彼に向かって答えた。「その贈物は、なるほどそれを必要とする者たちにとっては大きなものでしょう。しかし、わたしにとって学問より大きなものは、ほかにありません<sup>9)</sup>。わたしは、学問によって知識をたくわえ、父祖<sup>10)</sup>のほまれと富とを求めたいのです。」

ロゴテテスは彼の答えを聞くと、皇后<sup>11)</sup>のもとにおもむいて〔こう〕言った。「あの若い哲人は、現世〔の暮らし〕をきらっておりませぬ。そこで、わたしたちは、彼を〔官僚〕社会から〔そとへ〕出さず、彼を剃髪させて聖職者に任じ、彼に役職を与え、聖ソビ

1) 底本《въ стръпты》。訳は Vaillant, 3; Skazanija, 73 に拠る。詩篇, cxv, 5 参照。

2) 底本《тъчьја [sic] jedina sьmatrjaje i dьje》。

3) 《支配権を与え》(底本《dastь [……] vlastь [sic]》) は、Vaillant, 27 に拠れば、ギリシア語《didonai exousian》(〔自分の家に入出入りする〕許可を与える)の《mauvaise traduction》であるという。

4) 底本《abьje》。

5) 底本《i jako》。訳は Vaillant, 3f. に拠り、底本の《i》をのぞいて考えた。

6) 底本《jельmi ugaždaaše bogu, toьmi pače ljubьzněi vьsěmь byvaaše》。

7) 底本《отънадь iz licha》。

8) 底本《кьнежьje》。Vaillant, 27 に拠ってこの語をギリシア語《arkhē》(《charge》)に当たるものと解する。

9) 底本《něstь [sic, něstь と改める] ino》。

10) 墮罪以前のアダムを指す。

11) 皇后テオドラ(Theodōra)。皇帝テオピロス(Theophilos)の死後、ミカエル3世の摂政であった。

ア〔教会〕の総主教づき文書館長<sup>1)</sup>にいたしましょう。そうすれば、わたくしたちは少なくとも彼をひきとめることができるかもしれません。」そして彼らはじじつ彼に対してそのようにした。

しかし、哲人はきわめてわずかの間彼らとともにとどまったのち<sup>2)</sup>、《狭い海》<sup>3)</sup>のほとりへ行き、とある修道院に身を潜めた。人々は6ヶ月間彼を捜しつづけて、ようやく彼を見いだした。しかし、彼にかの〔以前の〕役職を強いることができなかつたので、〔大学〕教授の職<sup>4)</sup>を担当し、〔周囲の〕あらゆる支持と援助のもとに、自国と他国の人々に哲学を教授するよう、彼に懇望した。そして彼はこれを受けた。

V.—〔これよりさき〕総主教イアンネス (Iannēs)<sup>5)</sup>が異端の説を唱えた。彼は、聖像を礼拝すべきではないと言ったのである。人々は〔元老院〕会議を召集し、誤った説を説いているとして、彼を弾劾し、彼を〔総主教の〕座から追放した。しかし、彼は〔こう〕言った。「彼らはわたしを力づくで追放し、わたしを論破することをしなかつた。なぜなら、だれひとりわたしのことばを反駁することができないからである。」そこで皇帝は貴族たちとともに哲人の起用を決め、〔彼を〕イアンネスのもとへ派遣して、こう言させた。「もしおまえがこの若者<sup>6)</sup>を論破することができるなら、おまえはふたたびおまえの〔総主教の〕座を与えられるであろう。」

さてイアンネスは、からだつきの若い哲人〔——〕だが彼は哲人の内面の老熟した知性を知らなかつた〔——〕とその同行者たちとを見て、彼らに向かって〔こう〕言った。「おまえたちは、わたしの足台にもあたいたくない。それなのにどうしてこのわたしがおまえたちと、議論することがあろう。」すると哲人は彼に向かって〔こう〕言った。「俗世間のならわしに囚われず、神の掟に目を向けて下さい。なぜなら、あなたもまた神によって土と霊とから作られた者である<sup>7)</sup>ように、わたくしたちもみなそうなのですから。それゆえ、人よ、土を見たからといって、おごりたかぶってはなりません。」

するとイアンネスはふたたび答えた。「秋に花を捜すことも、老人を、ネストル (Nestōr)〔と呼ばれるにふさわしい人間〕を、そんじょそこらの若者のように、戦いへ駆りたてることも、穏当ではない。」すると哲人は彼に答え〔て言〕つた。「あなたは自分自身の非をみとめようとしています。魂が肉体よりも強いのはどの年齢か、言って下さい。」するとイアンネスは〔言った。〕「老年の時〔である。〕」そこで哲人は言った。「では、わたくしたちはあなたをどのような戦いに駆りたてるのでしょうか。肉体の〔戦いに〕

1) 底本《vivlotikařъ》(＜ラテン語 bibliothecarius)。当時《khartophulax》と呼ばれていた総主教づき首席秘書官兼文書館長の役職を指すものと解される。

2) 底本《malo že sъ nimi vъsъma pobuvъ》。

3) 当時ギリシア語で《to Stenon》と呼ばれたボスポラス海峡。

4) 底本《učitelъnyi stolъ》。

5) コンスタンティノポリスの総主教(837-843)《文法学者》イオアンネス (Iōannēs Grammatikos)。イアンネスは彼の論敵がつけたあだ名。テモテ II, iii, 8 参照 (Bujnoch, 161 に拠る)。

6) 底本 (Pastrnek [例言 2 参照] も同じ) 《junoše, sego》を Lavrov に拠って《junoša sego》に改める。

7) 底本《jesi i ty otъ zemlję i duše bogomъ sъstavljenъ》。

でしょうか、それとも魂の〔戦い〕にでしょうか。」するとイアンネスは言った。「魂の〔戦いにである〕。」すると哲人は答え〔て言〕った。「それならば、あなたはいま〔わたくし〕より強いはずです。ですから、わたくしたちにそのようなたとえ話をするのはやめて下さい。わたくしたちは、時ならずして花を捜し求めているわけでもなく、あなたを戦いに駆りたてているわけでもないのですから。」

かくて老人は恥じ入り、話頭を転じて〔こう〕言った。「若者よ、わたしに教えてもらいたい。十字架が破損していれば、われわれはそれに礼拝もせず、それに接吻もしないのに、聖像が描かれているのが胸までだけのばあい、おまえたちがそれに敬意を表して<sup>1)</sup>、恥ずかしいとも思わないのはなぜか。」すると哲人は答えた。「そのわけはこうです。十字架は4つの部分を持っていて、もしそのひとつでも欠けていれば、もはや固有の形をあらわしていません。しかし、聖像は、顔だけによって、描かれるべきおん者の形と、似姿とをあらわしています。それを見る人<sup>2)</sup>には、それはライオンの顔にもヤマネコの顔にも見えず、はじめに在ったものの形に見えるのです。」

ふたたび老人は言った。「ではおまえたちは、ほかに十字架があるというのに、なぜ銘のない十字架を礼拝するのか<sup>3)</sup>。また聖像のばあいは〔これに反して〕、なぜ描かれている者の名が書かれていなければそれに敬意を表しないのか。」すると哲人は答えた。「十字架はすべてキリストの十字架に似た形を持っていますが、聖像は、すべてが〔同じ〕一つの形を持っているわけではないからです。」すると老人は言った。「神がモーセに向かって、『あなたは、あらゆる像を造ってはならない』と言われた<sup>4)</sup>のに、なぜおまえたちは〔像を〕造って、それを礼拝するのか。」すると哲人は彼に反論して答えた。「もし神が、『どんな像をも造ってはならない』と言われたのであれば、あなたが異議を唱えることは正当です。しかし、神は、『あらゆる像を、すなわち、〔わたしに〕ふさわしくない像を<sup>5)</sup>〔造ってはならない〕』と言われたのです。」老人はこれに反論することができず、恥じ入って沈黙した。

VI.—さてこののち、サラセン人と呼ばれるハガルの子ら<sup>6)</sup>が、聖三位一体の単一の神性を誹謗して、〔こう〕言った。「なぜあなたがたキリスト教徒は、単一の神を信仰しながら、次には彼を三つに薄めて、『父と子と〔聖〕霊が存在する』と言うのであるか。あなたがたがはっきり説明できるのなら、このことについて述べ、またわれわれを説き伏せることができる者たち<sup>7)</sup>を派遣してもらいたい。」ところでこのとき、哲人は24歳であった。さて、皇帝は〔元老院〕会議を召集し、哲人を呼びよせ、彼に向かって言った。「哲

1) 底本 《čyšť [sic] jej tvorešte》.

2) 底本 《iže ja viditъ》.

3) 《ではおまえたちは〔……〕なぜ〔……〕礼拝するのか》，底本 《kako se ubo klanjajete》.

4) 出エジプト，xx, 4.

5) 底本 《ne vsjakogo, sirěčъ nedostoinajego》.

6) 《サラセン人》(底本 《Saracini》)，ないし《ハガルの子ら》(底本 《Agarēni》)は中世におけるアラビア人の呼称。ハガルはアブラハムの《つかえめ》で、アブラハムが彼女に生ませたイスマエルは、アラビア人の祖と考えられていた。創世，xvi, 15参照。

7) 《〔……〕述べ、また〔……〕説き伏せることができる者たち》，底本 《maže, iže moqatъ glagolati [……] i přepřeti》.

人よ、おまえは不浄なハガルの子らが、われわれの信仰に対してなんと言っているか、聞いているか。〔聞いているなら〕おまえは聖三位一体のしもべであり弟子なのであるから、行って彼らに反論するがよい。万物の完成者であり、父として子として聖霊として、三位一体においてたたえられる神が、おまえに恩寵と弁論の力を授け、三つの石でゴリアテに打ち勝ったダビデの再来としておまえをゴリアテの前に出現させ<sup>1)</sup>、おまえを天の王国にあたいするものとなして、われらのもとへ帰し給わんことを。〕〔これを〕聞くと哲人は答えた。「キリスト教の信仰のため、わたくしは喜んででかけましょう。なぜなら、わたくしにとって聖三位一体のために生きそして死ぬこと<sup>2)</sup>以上に、この世でどんなたのしいことがありましょうか。」そこで人々は秘書官ゲオルギオス (Geōrgios) を彼につけて、二人を送りだした。

かの地に到着したとき、一行は<sup>3)</sup>その地の者どもによってなされた異様で不快な事〔の数々〕を見た。それらはその地に住むすべてのキリスト教徒をあざけて笑いものにするために彼ら〔ハガルの子ら〕が行なったことであって、これが一行〔の心〕を少なからず悩ますことになった。すなわち、彼らは、すべてのキリスト教徒の家の扉の外側に悪魔の像を描き、彼らを驚愕させ、嘲笑していたのである<sup>3)</sup>。さて彼らは哲人に〔こう〕言っただけでなく、「哲人よ、あなたはこのしるしがなんであるか理解できるか。」すると哲人は言った。「〔わたしには〕悪魔の像が見える。思うにここの中にはキリスト教徒が住んでいるのであろう。つまり、悪魔たちはキリスト教徒と共に住むことができないので、彼らを避けて外へ逃げだす。しかし、外にこのしるがない家では、〔悪魔たちが〕彼ら〔家人〕と共に住んでいるのである。」

さて祝宴の席に座っていたとき、賢明な、幾何学・天文学その他の学問に通じた、教養ある人々であるハガルの子らが、哲人を試みるべく、〔こう〕言って質問した。「哲人よ、あなたにはこのおどろくべき奇蹟が見えるか。すなわち、神の予言者マホメットは神からの善き知らせをわれわれのもとにもたらし、多くの人々を回心させた。そしてわれわれはみな彼の律法に従い、なに一つ違反することがない。しかるに、あなたがたキリスト教徒は<sup>4)</sup>、おのれの預言者キリストの律法を守ってはいるが、ある者はこう、またある者はこうと、あなたがたのおのおのに都合のいいように〔律法を〕守り、またふるまっているではないか。」

するとこれに対して哲人は答えた。「われわれの神は海の深みのようなものである。ところで預言者は彼について〔こう〕言っている。『だれが、彼の血統を説き明かすことができようか。なぜなら、彼の生命は地から取り去られるのだから<sup>5)</sup>。』そこで、この神を捜

1) 《おまえを〔……〕出現させ》、底本《javitъ te》。なおサムエル I, xvii, 40 参照。

2) 底本《živu byti i umrěti》。

3) 以下《嘲笑していたのである》まで、底本《uzbrěše stranъnyje i gnusъnyje vešti sъdějavъšeje se otъ nіchъ tamo, ježe sъtvorili běachъ na porāganъje i posrijanъje [sic, posmijanъje と改める] saštіimъ christъjanomъ vъsěmъ, vъ městě onomъ živāštіimъ, oskrъbljajašte ichъ ne malo. běachъ bo obrazy demonъskъje parъsali vъnějadu na dvъrъchъ vъsěchъ christъjanъ. divy tvorešte i raġajašte se》。

4) 底本《vy, christъjani》。

5) イザヤ, liii, 8.

し求めるために、多くの人々がその深みの中にはいってゆき、そして知力の強い者が神の助けを借りて知識のゆたかさを得、泳ぎきってもどってくる。しかし、〔知力の〕弱い者はあたかも朽ちた船で渡航を企てる者のように、ある者は沈み、ある者はかろうじて息を吹きかえし、無気力な虚脱の状態で〔波間に〕ただようことになる。ところが、あなたがたの〔海〕は狭くまたくみしやすいから、子供も大人も、あらゆる者が跳びこえることができる。なぜなら〔そこには〕俗世間のしきたり以外には〔なにひとつ〕なく、だれもが行ないうること〔のみがあるからだ〕。彼〔マホメット〕はあなたがたになにひとつとして禁じていない。つまり、彼はあなたがたの怒りや欲望を抑えることはせず、かえって許した。だとすれば彼はあなたがたをどのような奈落へつき落すことであろうか。分別ある者は〔それを〕悟るがよい。ところが、キリストはそうでない。そうでなくてキリストは〔人性の〕重い〔劣った〕要素を〔地上の〕低い所から〔天上の〕高い所へと運び去り、信仰と神のみ業とによって人をお教えになる。彼はまた万物の創り主として、天使と動物の間に人間を創られ、ことばと理性によって人間を動物から分けられ、怒りと欲望によって天使から〔分けられた〕。したがって、だれか〔人間〕がどちらかの側に近づけば、それに応じて、より高い者たちか、あるいはより低い者たちに関与することになるのである。」

すると彼らはふたたび彼にたずねた。「神は単一であるのに、なぜあなたがたは三位としてたたえるのか。知っているなら教えてもらいたい。あなたがたは〔彼を〕父とも、子とも〔聖〕霊とも呼ぶではないか。もしそのように言うのであれば、あなたがたは彼から多くの神々が次々に生まれるように、彼に妻を与えるがよからう。」すると哲人はこれに対して〔次のように〕答えた。「そのように恥ずべき瀆神〔のことば〕を口にしてはならない<sup>1)</sup>。わたしたちは預言者たち、父祖たち、師父たちから<sup>2)</sup>、三位一体を、〔すなわち〕父とみことばと〔聖〕霊を、〔すなわち〕一つの本質における三つの位格をたたえることを、十分に学んでいる。さてみことばが、ひとりの処女において受肉し、われわれの救いのために〔この世に〕生まれたのである。それはあなたがたの預言者マホメットも次のように書いて証（あかし）しているとおりである。『われらはわれらの霊をひとりの処女につかわし、彼女が産むことをよしとした<sup>3)</sup>。』これにもとづいてわたしは三位一体をあなたがたに告知するものである。」

彼らはこれらのことばに打ち負かされ、他に話頭を転じて〔こう〕言った。「客人よ、あなたの言うとおりで。しかし、キリストがあなたがたの神であるならば、なぜあなたがたはキリストが命じるとおりにふるまわないのか。なぜなら、福音書には『敵のために祈れ。憎む者と迫害する者に善を行なえ。〔あなたがたを〕打つ者には頬を向けよ』と書いてある<sup>4)</sup>。ところが、あなたがたはそのようではなくて、逆にあなたがたに対してそのようなことを仕向ける者たちに対し、敵対するための武器を研いでいるではないか。」哲人

1) 底本 《ne glagolite tako chuly beštŭstny》.

2) 底本 《отъ пророкъ і отъ отьсь і učitelj [sic]》.

3) コーラン, xix, 17-21 参照。

4) マタイ, v, 44; ルカ, vi, 27-29.

はこれに反論して〔次のように〕答えた。「かりに律法の中に二つの掟があるとすれば、どちらが〔真に〕律法を全うする態度を示していると言えるだろうか。一つ〔の掟だけ〕を守る者だろうか、それとも両方とも〔守る者だろうか。〕すると彼らは答えた。「両方とも〔守る者である。〕」すると哲人は言った。「神は『はずかしめる者のために祈れ』と言われた<sup>1)</sup>。神はまた『友のために自分の命を捨てることよりも大きな愛は、だれもこの世であらわすことができない』とも言われた<sup>2)</sup>。わたしたちは友のためにこれを行なっているのである。それは肉体が囚われているからといって彼らの魂もまた囚われることがないためである。」

彼らはさらに〔こう〕言った。「キリストは自分のためにも他人のためにも税を納めた<sup>3)</sup>。それなのに、あなたがたはなぜ彼の〔したとおりの〕行為をしないのか。それにまた<sup>4)</sup>抵抗する〔のはいい〕としても、せめてあなたがたの兄弟・友人のために、かくも強大なイスマエルの民<sup>5)</sup>に、なぜ税を納めないのか。われわれの求めているのはごくわずかであって、〔一人あたり〕金貨一枚にすぎない。〔かくしてこそ〕われわれは、全地の存続するかぎり、互いの中にほかのだれも〔保つことが〕できないような平和を保つであろう。」すると哲人は答えた。「師の足跡をたどる者はだれでも、師〔が行かれた〕と同じ足跡をたどりたいと望んでいる。ところが他の者が行き逢って、彼を〔その道から〕そらそうとするなら、いったいその者は彼の友であろうか、それとも敵〔であろうか。〕」すると彼らは答えた<sup>6)</sup>。「敵〔である。〕」すると哲人は言った。「キリストが税を納められたとき、存在したのはいかなる主権か。イスマエルの〔主権〕か、それともローマの〔主権〕か。」すると彼らは答えた。「ローマの〔主権である。〕」すると彼は言った。「では、われわれを非難するのはあたらない。なぜなら、われわれはみなローマ人に税を納めているのであるから。」

その後、彼らは彼にほかの多くの質問をし<sup>7)</sup>、自分たちも通じているあらゆる技芸にわたって彼を試みた<sup>8)</sup>。しかし彼は彼らにすべてを説き明かした。これらのことについても哲人が彼らを説き伏せると、彼らは彼に向かって言った。「あなたは、どうしてこれらすべてのことを知っているのか。」すると哲人は彼らに言った。「ある人が海で水を汲み、それを袋につめて運びながら、異郷の人々に向かって〔次のように〕言いながら自慢していた。『おまえたちに〔この〕水が見えるか。これはおれのほかにはだれひとり持っていない〔水だ。』』すると、海辺に住むひとりの男がやってきて、彼に〔こう〕言った。『〔そんな〕悪いにおいのする袋ひとつを自慢するなんて<sup>9)</sup>、おまえは頭がおかしいんじゃないか？ おれたちはそいつをひと海ぶん持っているんだぜ。』あなたがたもまた、〔自慢した男

1) ルカ, vi, 28.

2) ヨハネ, xv, 13.

3) マタイ, xvii, 24-27 参照。

4) 底本 《i juže》. Vaillant, 28 に拠れば, 《i juže》 はギリシア語 《kai loipon》 の訳であるという。

5) 8 ページ 注 6 参照。

6) 底本 《отъвѣщаѣ》.

7) 底本 《въпросише ѿ》.

8) 底本 《iskušajšte otъ, vsěchъ chadožbъstvъi》 を 《〔……〕 otъ vsěchъ [……]》 に改める。

9) 底本 《chvalę se tьkъmo a smrdęštъimъ męšъci》 の 《a》 を 《o》 に改める。

と] 同じようにふるまっている。あらゆる技芸は、われわれから出たものなのだ。]

このあと、彼らは哲人をおどろかせようとして、以前作られ、[時として] 地中からはえ出る庭園<sup>1)</sup>を彼に見せた。哲人が彼らにどうしてそうなるかを説明すると、彼らは今度はあらゆる財宝と、金や銀や、宝石や真珠で飾られた邸宅とを彼に見せて言った。「哲人よ、見よ、おどろくべき[この]奇蹟を！ サラセン人の宗主たるアメルムネス (Ameroumnēs)<sup>2)</sup>の力は偉大であり、その富は莫大である。」すると哲人は彼らに向かって言った。「これはおどろくべきことではない。これらすべてを作られ、慰めとして人間に与えられた神に称賛と栄光あれ。なぜならそれらは神のものであって、ほかのだれのものでもないのだから。」するとさいごに、彼らは持ち前の悪心にたちもどり、哲人に毒を飲ませた。しかし、「たとえあなたがたがなにか命にかかわるものを飲んでも、それはあなたがたに害を与えないだろう<sup>3)</sup>」と言われた<sup>4)</sup>慈悲ぶかい神は、かの哲人をも救われ、彼をふたたびつつがなくその国へ帰されたのであった。

VII.—その後間もなく、哲人はこの[世の]生活をすべて<sup>5)</sup>捨て、ひっそりとある場所に居を定め、おのれ自身にのみ心を潜め、あすのためになにひとつ残さず、すべてを貧者に分け与え、毎日万事につけて配慮される神に[おのれの]わずらいをまかせていた。さてあるとき、祝日に、彼の召使いが、「われわれにはこのような晴れの日のためのものが、なにひとつない」とぐちをこぼした。すると哲人は彼に向かって[こう]言った。「かつてイスラエルの民に荒れ野で食を恵まれたおん者が、この地のわれらにも食物をお与えくださるだろう。ともかくも、でかけて行って、貧しい者を少なくとも5人呼んできて、神の御援助を期待して[待つ]がよい。」食事の時刻になると、とつぜん<sup>6)</sup>ひとりの男がさまざまな食物をひと包みと金貨を10枚たずさえてきた。哲人はこれらすべてのことについて、神に感謝を捧げた。それからオリュンポス (Olumpos) [山]<sup>7)</sup>の自分の兄メトディオス (Methodios) のもとへ行き、[そこで]暮らしながら、たえず神に祈りを捧げ、聖典のみをおのが友とするようになった。

VIII.—さて[あるとき]、ハザール人<sup>8)</sup>のもとから皇帝のもとへ使者たちがきて、[こう]述べた。「われわれは万物の上におられる単一の神を初めから知っている。われわれは、東に向かってこの神を礼拝しているが、他の自分たちの恥ずべき風習を[もいまだに]守っている。さて、ヘブライ人はわれわれに彼らの信仰としきたりを受け入れるようにすすめ、他方、サラセン人は平和と多くの贈物を提案しつつ、自分の信仰をわれわれに

1) テクスト 《vrbtogradъ nasaždenъ inogda otъ zemlję izniknęštъ》の意味はかならずしも明確ではない。訳はかりにおおむね底本、193のそれに従った。なお Skazanija, 113の《nasaždenъ》を《nesaždenъ》と訂正する試みはかなり魅力的である。

2) ビザンティン帝国におけるバグダードのカリフの呼称。

3) 底本 《ne imatъ vasъ vręditi》。

4) マルコ、xvi, 18.

5) 底本 《vъsego žitbja sego》。

6) 底本 《abъje》。

7) トルコの、マルマラ海沿岸地方の都市ブルサ (Bursa) の南東にある Ulu Dağ 山のギリシア名。

8) ハザール人 (Kozari, ロシア語 xazary) は、7世紀から10世紀半ばまで、ヴォルガ川下流からコー

おしつけようとして、『われわれの信仰は、他のすべての民〔の信仰〕よりもすぐれている』と言う。それゆえ、われわれは古くからの友好関係と愛情を保ちつつ<sup>1)</sup>、あなたがたのもとに〔使者たちを〕派遣する。なぜなら、あなたがたは偉大な民であり、神から〔受けた〕帝国を保有しているからである。われわれはあなたがたの忠告を得たく、〔ついては〕あなたがたのうちの学識ある人物〔の派遣〕を懇請する。それはわれわれが、もし彼がヘブライ人とサラセン人とを論破したなら、あなたがたの信仰を受け入れんがためである。』

そのとき、皇帝は哲人を捜し求め、見つけだすと、彼にハザール人の一件を説明して〔こう〕言った。「哲人よ、この者どものもとへ行き、聖三位一体について、その〔聖三位一体の〕力を借りて、彼らに教えきかせ、かつ答えてもらいたい<sup>2)</sup>。なぜならほかの者はだれひとり、このことをりっぱに果たすことができないからである。」すると哲人は言った。「陛下、もしも陛下がお命じになるのでしたら、わたくしはこのような事業のために<sup>3)</sup>、主が<sup>4)</sup>その弟子たちになぞさえることを許されなかったものはなにひとつ持たず<sup>5)</sup>、喜んではだして歩いてまいりましょう。」すると皇帝は答えた。「もしおまえが自分からこのことを果そうとしているのであれば、おまえの言うことはもっともである。だが皇帝の権力と尊厳とを知っている以上、おまえは皇帝の援助を受け、威厳をもって行ってほしい。」

さて彼はただちに<sup>6)</sup>旅に出てケルソン (Khersōn) に到着し、そこでユダヤ人の話しことばと文字を学び、〔伝統的なギリシア〕文法の8部門を〔ヘブライ文法に〕適用し<sup>7)</sup>、それによってより多くの知識を得た。さて、そこにひとりのサマリヤ人が住んでいた。彼は哲人のもとに来て、彼と<sup>8)</sup>議論をたたかわせた。そしてサマリヤ語の聖典をもって来て哲人に示した。哲人は彼からそれを乞い受けると、家にとじこもって祈りを凝らした。すると哲人は神から知識を授けられ、誤りなくそれらの聖典を読みはじめた<sup>9)</sup>。これを見てサマリヤ人は大声で叫んで〔こう〕言った。「まことに、キリストを信じる者はすみやかに聖霊と恩寵を受けるのである。」さて彼はすぐさま息子に洗礼を受けさせ、自分も息子につづいて洗礼を受けた。

さて、哲人はその地でシリアの<sup>10)</sup>文字で書かれた福音書と詩篇を見だし、またそのことばを話す者を見いだした。哲人は彼と話し合って単語の意味を理解し、自分のことばと

カサス北部の草原地帯に至る地域で、いわゆるハザール汗国 (ロシア語 *Xazarskij kaganat*) を形成していたテュルク系民族。

- 1) 底本 《staraja družba [sic] i ljubvь držešte》.
- 2) 底本 《stvori imъ slovo i otvѣtъ》.
- 3) 底本 《na sikovaja řečъ》.
- 4) 底本 《gospodъ》.
- 5) マタイ, x, 9-10; ルカ, x, 4.
- 6) 底本 《abъje》.
- 7) 訳は Vaillant, 28 の解釈に拠る。
- 8) 底本 《sъ nyimъ》を 《sъ nimъ》に改める。
- 9) 底本 《nažetъ》を 《načetъ》に改める。
- 10) 底本 《rosъsky (rušъskymi)》. *rosъskъ*, etc. は大多数の研究者によって元来の 《surъskъ》 (《シリアの》) の意味を解しかねた写し手によって書き誤られた形と推定されている。底本, 42-44; Vaillant, 9, 28 ; Dvornik, xx ; Skazanija, 115-117 を参照。

比較して母音文字と子音文字とを区別し、神に祈ってやがて〔そのことばを〕読みかつ説明しはじめた。そして多くの人々が彼に驚嘆し、神をたたえたのであった。

さて、哲人は聖クレメンズ (Clemens)<sup>1)</sup>がいまだに海中に横たわったままでいると聞いて、祈りを捧げてこう言った。「わたしは神を信じ、聖クレメンズに、わたしが彼〔の遺骸〕を見だし、海から引き揚げることになろうと、期待している。」それから大主教を説得し、聖職者一同と敬虔な人々とともに一艘の船に乗りこみ、その場所へとおもむいた。海が大いに凧いで彼らが〔その場に〕到着したとき、彼らは〔詩篇を〕誦しながら掘りはじめた。するとたちまち<sup>2)</sup>、たくさんの香を焚いたように強い芳香が匂いたち、これにつづいて聖遺体があらわれた。哲人がその『〔聖クレメンズ遺骸〕発見〔記〕』<sup>3)</sup>で書いているように、彼らは大いなる畏敬の念と住民一同の称賛のうちに<sup>4)</sup>、〔それを〕引き揚げ、町へ運び入れた。

さて、ハザールの軍司令官が兵をひきいて来襲し、とあるキリスト教徒の町をとりかこみ、まわりに包囲陣をしいた。哲人はこれを知るとためらうことなく彼のもとにおもむき、彼と話し合い、教えさとし、彼〔の心〕をしずめた。すると彼は洗礼を受けることを哲人に約束し、この人々になんら危害を加えずに立ち去った。

さて哲人はおのれの旅にもどった。第1刻に哲人が〔早朝〕祈禱を捧げていると、ハンガリー人たちがオオカミのようにほえながら、彼を殺そうとして彼に襲いかかった。だが哲人は恐れもせず、祈禱もやめず、ただ「主よ、あわれみ給え<sup>5)</sup>」と叫んだだけであった。なぜならばやくも聖務を終えていたからである。他方ハンガリー人たちは彼を見ると<sup>6)</sup>、神のご命令によってしずまり、彼〔の前〕に平伏しはじめた。彼らは哲人の口から説教を聞き、哲人を同行者一同とともに行かせた。

IX.—さて、哲人は船に乗り、マイオティス湖 (Maiōtis limnē)<sup>7)</sup>と、カフカスの山々のカスピの門 (Kaspiai pulai)<sup>8)</sup>を目指して、ハザール人の〔地への〕旅に登った。しかるにハザール人たちは哲人を出迎えるために悪がしこく陰険な〔ひとりの〕男を派遣した。この男は哲人と話し合って、彼に〔こう〕言った。「あなたがたにはなぜ、ある皇帝に代えて別の皇帝を別の一族から立てるといふ悪い習慣があるのか。われわれはこれを〔同

1) 1世紀末のローマの司教。聖ペテロから数えて第3代の教皇。ただしコンスタンティノスは、この地に葬られた同名のべつの殉教者の遺骸を、聖クレメンズのそれと誤信していた。Dvorník, 190-197 参照。

2) 底本 《abъje že》。

3) 現存しないが、コンスタンティノスがこの著作をギリシア語で書いた事実は他の資料によって確認される。底本, 197; Skazanija, 118; Dvorník, xx, 196 f. 参照。

4) 底本 《съ velikoja čьstьja i съ slavoja vьsěchъ graždанъ》。

5) 底本 《kyrije eleisonъ》。

6) 底本 《uzьgěvъše i》。

7) 底本 《Meotъskoje jezero》。アゾフ海の古名。

8) 底本 《Kapiiskaja vrata》。底本 47, 注 17 は、《Kapiiskaja vrata》を古代ギリシアの都市 Panti-kapaion (現代の Kerč) に関係づけて現代のケルチ海峡 (Kerčenskij proliv) と取る Miklosich 以来の解釈を採用している。Pastrnek (例言 2 参照), 57, 175; Bujnoch, 165 も同様。これに対し Dvorník, xx, 183; Fr. Dvorník, Byzantine Missions Among the Slavs, New Brunswick,

じ]一族〔だけ〕で行なっているのに。」すると哲人は彼に向かって〔こう〕言った。「なぜなら、神もまた、み心にかなうことはなにもしないサウルにかえて、み心にかなおうとするダビデをお選びになったからである。」

するとハザール人はふたたび言った<sup>1)</sup>。「あなたがたは、いったいなぜ、両手に書物を持ち、書物に拠ってあらゆるたとえ話をするのか。われわれはそうはしない。われわれは、あたかも〔前もって〕呑み込んでおいたように、あらゆる知恵を〔自分の〕胸からとり出す。あなたがたのように聖書などを誇りにはしない。」すると哲人は彼に向かって言った。「それに対して、わたしはあなたに〔こう〕答えよう。もしあなたが裸の男に出合い、その男があなたに、『わたしは衣服と黄金をたくさん持っている』と言ったとすれば、あなたは彼が裸であるのを見ても、彼の言うことを信ずるだろうか。」するとハザール人は言った<sup>2)</sup>。「信じない。」すると哲人は彼に向かって言った<sup>3)</sup>。「では、わたしもあなたに言おう。もしあなたがあらゆる知恵を呑み込んでいるのなら、われわれに教えてもらいたい。モーセに至るまでいくつ世代があったか、またどの世代がどれほどの年月つづいたか。」するとハザール人はこれに答えることができず、沈黙した。

さて、哲人がかの地に到着して、〔一同が〕汗のもとで祝宴の席に着こうとしていたとき<sup>4)</sup>、彼らは哲人に質問して〔こう〕言った。「あなたの位はなにか。われわれはあなたをその地位〔にふさわしい席〕に着かせたい。」すると哲人は言った。「わたしには偉大な、いとも名誉ある先祖があった。彼は皇帝のそば近くにいたが、自分に与えられた名誉をみずからの意志によって放棄し、〔そのために〕追放された。彼は異郷の地にたどりついて零落し、そこでわたしを生んだ。わたしは〔今まで〕先祖のむかしの名誉を求めてきたが、それを得るに至らなかつた<sup>5)</sup>。わたしはアダムの子孫なのだ。」すると彼らは答えた。「客人よ、あなたの言うことは適切で正しい。」このときから、彼らは哲人に対し、前にもまして尊敬の念をあらわすようになった。

さて、汗は盃をあげて言った。「万物を創り給うた唯一の神のために飲もうではないか<sup>6)</sup>。」すると哲人が盃をあげて〔こう〕言った。「わたしは唯一の神とそのみことばのために飲む。神はみことばによって万物を創り給い<sup>7)</sup>、〔もろもろの〕天はそのみことばによって確固たるものとなった〔のだから〕<sup>8)</sup>。また生命を創り出す〔聖〕霊の〔ために飲む〕。天の万軍がそれによって成り立っている〔のだから〕<sup>9)</sup>。」すると汗が哲人に答えた。「われわれはすべて同じことを言っているのだが、その点についてだけは考えが違う。な

1970, pp. 67 f., 344; Skazanija, 119; Vaillant, 29は《Kaspiiskaja vrata》(Lavrov のテキストも同様)と読み、ビザンティン文献の《Kaspiai pulai》, すなわちカスピ海沿岸の現代のDerbent 付近の通路を指すものとする。われわれはあの方の解釈に従った。

1) 底本《reče paky》。

2) 底本《o reče》を《i reče》に改める。

3) 底本《reče že jemu》。

4) 底本《chotěchą [……] rěsti》を《chotěchą [……] sěsti》に改める。

5) 底本《ne dostigъ onoje prijěti》。

6) 底本《рѣямъ въ имѣ бoga jedinogo》。

7) 底本《сѣтворѣшаего словомъ вса tvarь》。

8) 詩篇, xxxiii, 6.

9) 詩篇, xxxiii, 6 参照。

ぜならあなたがたは三位一体をたたえるが、われわれはわれわれが受けた聖書に拠って唯一の神を「たたえるのだから。」すると哲人は言った。「みことばと〔聖〕霊を述べ伝えているのは〔ほかならぬその〕聖書である。かりにもし、ある人があなたに敬意を払いつつも、あなたのことばと霊を尊敬せず、これに対してもう一人の人があなたのすべてを<sup>1)</sup>尊敬するとしたら、尊敬の念がより厚いのは、いったいこの二人のうちのどちらだろうか。」すると汗は言った。「三つ全部を尊敬する者〔である〕。」哲人は答えた。「だとすれば、われわれもまた、行為によって〔そのことを〕示し、かつ預言者〔のことば〕に耳をかたむけるがゆえに、〔神に〕より多く〔の敬意〕を払っているのである。なぜならイザヤも言った〔ではないか〕。『ヤコブよ、わたしが召したイスラエルよ、わたしに聞け。わたしは初めであり、そしてわたしは永遠に存在する<sup>2)</sup>。いま、主はわたしとその霊とをつかわされた<sup>3)</sup>。』」

すると、ユダヤ人たちが、哲人のまわりをとりかこんで、彼に言った。「では言ってもらいたい。見ることもできず、ましてや生むこともできない神を、どうして女性が胎内に宿することができるのか。」すると哲人は汗とその首席顧問官とを指さして「こう」言った。「かりにもし、ある人が、首席顧問官は汗を泊めることができない、と言い、そのあとで、汗の最下等の奴隷は彼を泊めることもできるし、尊敬の念を示すこともできる、と言ったとすれば、われわれは「この人を」なんと呼ぶべきだろうか。わたしに言ってもらいたい。気狂いと「呼ぶべきだろうか」。それとも分別ある人と「呼ぶべきだろうか。」すると彼らは言った。「もちろん途方もない気狂いと「呼ぶべきである。」」すると哲人は彼らに向かって言った。「目に見える被造物のうち、もっともとうといものはなにか。」すると彼らは哲人に「こう」答えた。「人間である。なぜなら人間は神のかたちにならされているから<sup>4)</sup>。」すると哲人はふたたび彼らに向かって言った。「それならば、神が人間の中に宿ることができないと言う人は、どうして愚かでない〔と言える〕のか<sup>5)</sup>。モーセとヨブに姿をあらわされたとき、神は茂みの中にも、雲の中にも、嵐の中にも、煙の中にも宿っておられたではないか<sup>6)</sup>。ある人が病んでいるとき、〔病んでいない〕ほかの人をなおすということがどうしてあり得ようか。それゆえまた、人間の種族が墮落したら、いったい創造主御自身以外のだれによって、〔この種族は〕ふたたび改新を受けるというのか。わたしに答えてもらいたい。医者が病人に膏薬をはろうとするばあい、木にはるだろうか。それとも石にはるだろうか。それで病人がなおったと思わせる〔ことができる〕だろうか<sup>7)</sup>。またモーセはなぜ、聖霊〔のはたらき〕によって、両手をさしのべて、みずからの祈りの中で「こう」言ったのだろうか。『あわれみ深い主よ<sup>8)</sup>、これからは岩のとどろきやらっ

1) 底本 《vbse tvoje》。

2) イザヤ, xlvi, 12 参照。

3) 底本 《nynja gospodь posъla me》。イザヤ, xlvi, 16。

4) 創生, i, 17。

5) 底本 《kako ne sať trěsnoveni》。

6) 出エジプト, iii, 2; xix, 18; ヨブ, xxxviii, 1 参照。

7) 底本 《i javit' li ot' sego člověka iscělěv'ša ?》。

8) 底本 《gospodi štedn'ri》を《gospodi štedr'ri》に改める。

ばのひびきの中で<sup>1)</sup>、わたしたち〔の前〕にあらわれなくて下さい。そうではなく、わたしたちの罪を取り去って、わたしたちの臓腑の中に住みついて下さい。』げんにアキュラス (Akulas)<sup>2)</sup>もそう言っている〔ではないか〕。」

こうして〔一同は〕、これらすべてについて話し合いを行なう日を取りきめたのち、祝宴〔の席〕を離れて、散会したのであった。 (未完)

---

1) 出エジプト, xix, 16 参照。

2) 紀元 2 世紀, ハドリアヌス (Hadrianus, 在位 117-138) の治世に, 旧約聖書をギリシア語に翻訳したユダヤ人学者。ラテン名はアクウィラ (Aquila)。ユダヤ教徒たちはアキュラスの訳を, 「70 人訳」よりもヘブライ語のテキストに忠実であると考えていたので, コンスタンティノスはこれを逆手にとってユダヤ人たちに対する反証としたのであろう。なお Vaillant, 29 に拠れば, ここに引かれたモーセの祈りは, ところどころ出エジプト, xxxiv, 6, 8, 9 のアキュラス訳を利用しているという。